

「原子力教育」どうあるべきか

安全な技術確立必要

「失敗学」導入しては

東京電力福島第一原発事故以降、原子力教育の現場はどうなったのか。原子力に関わる人材育成の在り方を考える「未来エネルギーシンポジウム」が東京で開催された。パネリストとして参加した大学院生の中には「原子力を学んでいると言いつらい」と苦しい胸中を告白する人もいた。原子力行政が岐路に立つ中、現場技術者の使命感の重要性を訴える声も多かった。

都内でシンポ、学生ら参加

東京都大と早稲田大の両大学院が連携する共同原子力専攻が主催。教育者や学生、行政、産業界の原子力関係者が参加した。

東京都大の中村英夫学長は「福島の事故後、原子力を

学ぼうと志願する人が減る」とは減ったが、残った学生は使命感を持って学んでいる。福島出身の学生もおり、宝島として育てたい」と冒頭に言いさす。原子力教育の必要性については「今後、原発を動かしていくにしても臨海にするにしても、必要な知識を持ち、やる気にあふれた技術者がいなければならぬ」と述べた。



原子力関係者や学生が集った「未来エネルギーシンポジウム」

東京都千代田区のホテル



シンポジウムには、原子力工学を学ぶ大学院生や大学生もパネリストとして参加した

桜美林中・高（東京）の向井敬教諭は、中学・高校での原子力教育の現状について説明。同高校の3年生を対象にしたアンケートで、「原子力発電は必要」と答えた生徒は4年前の45%から28%に減ったという。

向井教諭は物理で放射線の性質や原子力の安全利用について学ぶ「原子と原子核」は、高校2、3年の学習指導要領では必修ではないことに触れて「受験勉強に出ないことは勉強したくないと考える生徒が多いので、教えづらい面がある」と話した。

大学での原子力教育の課題について話したのは、東京都市大の松本哲男教授。「福島第一原発の反省を踏まえて、

安全な技術確立すること」を、これからの技術者の使命だとした。近年の教育では、従来の工学に加えて、技術者倫理など安全配慮に対する教育を重視していると指摘した。

パネルディスカッションに出た大学院生は「アルバイト先で何を学んでいるかを聞かれると、原子力と言えず『機械の勉強をしています』と言ってしまう。胸を張って原子力を勉強していると言えぬ環境になつてほしい」と、事故後のつらさを明かした。

別の大学院生は「これまでに経験を踏まえた『原子力失敗学』のような授業があると面白いと思う」と提案。松本教授も「学問に失敗を取り入れていくのは、これからの課題だと思ふ」と同調。1999年に茨城県東海村で核燃料加工会社ジェー・シー・オー（JCO）が起きた臨界事故の報告書を授業で用いるというアイデアも別の教育者から出た。

●この記事・写真等は共同通信社、静岡新聞社の許諾を得て転載しています。無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。